

出典情報の著者名の漢字表記の訂正について

○訂正内容

問題2の出題文の出典情報に、著者名の漢字表記の誤りがありましたので、以下のとおり訂正いたします。

ご迷惑をおかけしました関係者の皆様に心よりお詫び申し上げますとともに、今後このようなことが起こらないよう入試業務全体のチェック体制を強化し、再発防止に努めてまいります。

なお、今回公表した試験問題は、訂正後のものとなります。

【問題1 5ページ、最終行】

正) 奥野克巳『ひっくり返す人類学—生きづらさの「そもそも」を問う』による。一部改変。

誤) 奥野克己『ひっくり返す人類学—生きづらさの「そもそも」を問う』による。一部改変。

○対応措置

当該誤りにより正答が導き出せない設問がないことから、採点・合否判定のやり直しは行いません。

2026年度(令和8年度) 高崎経済大学
経済学部 前期日程 問題訂正

【 外国語 (英語) 】

訂正箇所	4 ページ 問題 1 Figure 1 タイトル
誤	The <u>number</u> of ...
正	The <u>Number</u> of ...
訂正箇所	1 2 ページ 問題 2 3～4 行目
誤	...in favor of <u>keeping</u> their own family names...
正	...in favor of <u>letting people keep</u> their own family names...

【 国語 】

訂正箇所

三頁 問題一 十五行目

正	誤
…このような社会環境 における検索エンジン…	…このような社会環境 にける検索エンジン…

三頁 問題一 十六行目

正	誤
…情報オーバーロード環境に おいては、何かを見つけ出す…	…情報オーバード環境に おいては、何か見つけ出す…

四頁 問題一 五行目

正	誤
「インターネットの「プラットフォーム化」が進行した現代の…	「インターネットの「プラットフォーム」が進行した現実の…

国語

(国語)

答案作成上の注意

- 一 解答はすべて解答用紙の指定された欄に記入しなければいけません。
- 二 国語は(二)ページから(二十五)ページまでです。
- 三 解答用紙の受験番号欄は三か所です。氏名を書いてはいけません。
また、※印欄には何も記入してはいけません。
- 四 解答には筆記用具、消しゴム以外のものを使用してはいけません。
- 五 解答の文字は正確かつ丁寧に書きなさい。特に漢字は楷書で書き、くずし字や略字を使用してはいけません。また、字数指定がある場合は、句読点等も一字とします。
- 六 問題冊子と使用しない解答用紙は持ち帰ってください。

問題一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

日常生活でさまざまに活用されているアルゴリズムだが、実際には多くの場合ブラックボックスとして扱われ、その手順やつづきのしくみに注意が払われることは多くない。難しそうなアルゴリズムについては、なるべくなら深く考えずに済ませた方が「ラク」だからだ。このことはすなわち、わたしたちが意識する／しないにかかわらず、機械やコンピューターによる様々な処理が「信頼」しうる対象として認識されていることに他ならない。この「^A信頼」とはどういったものだろうか。そしてその「信頼」には果たして十分な根拠があるといえるのだろうか。

機械に対する「信頼」とは、人間が機械に対して行う操作（入力）に対して、その機械がどのような結果（出力）をもたらすか、という入力と出力の関係が、一貫したルールに基づいて予測可能であることを意味している。しかしそれは、入力に対して忠実に出力を行うということであり、必ずしも「正しく」動作することを意味しない。自動車の場合、アクセルを踏み続けるという入力を行えば、自動車は忠実に速度を上げるという出力を遂行し続ける^①。その際、制限速度を超えないように「正しく」動作するかどうかは、自動車という機械の仕組みではなく、操作する人間の入力に依存している。操作する人間が速度違反を気にしなければ、機械は忠実に速度を上げ続けることになる。

SNS上の投稿を入力として、フォローワーにその投稿を出力するという単純なアルゴリズムを考えてみよう。この場合、悪意を持って偽情報を拡散しようとするユーザーの入力は区別されることなく（対等に）扱われ、その情報が偽情報だろうが正しい情報だろうが、フォローワーには両方の情報が出力されることになる。

あたりまえのようだが、コンピューターという機械に何かの処理を委任する^②ということは、あくまでその入力に対する出力の一貫性を「信頼」するということにすぎない。しかしこの「信頼」は「機械は正確に動作するのだから、機械の出す結果には偏りがないはずだ」という「過剰な期待」に容易にすり替わってしまい、人間よりも機械が「正しい」と思いこんでしまうことがある。よく考えてみればわかる通り、人間の入力に「誤って」いれば、機械やアルゴリズムは忠実にその「誤り」を反映するように動作す

る。

個人が利用できるパーソナルコンピュータ(パソコン)、そしてインターネット、さらにはスマートフォンの普及は、これらのメディアを通じて流通する情報量の爆発的な増大をもたらした。この情報量の増大はかつてはマス・メディアによって独占されていた情報発信能力が、インターネットによって一般のユーザーに「解放」され、誰もが情報発信することが可能になったことが大きな要因だ。

インターネットのWWW(ワールド・ワイド・ウェブ)で情報発信するためには、当初はHTMLとよばれる言語を使って、ウェブページを自分で記述する必要があったが、2000年代前半から一般化した「ブログ」、さらには2000年代後半から普及が始まったSNSなどによるインターネットの「プラットフォーム化」は、特別な知識やスキルがなくても簡単に情報発信ができるメディア環境をもたらした。このような一般ユーザーによって表現・発信されるコンテンツのことをUGC(ユーザー生成コンテンツ)とよぶが、UGCの流通を可能にするプラットフォームの普及が、流通情報量を指数関数的に増加させることになった。

人間の許容量を超える情報量の爆発的な流通によって、必要な情報を見極めたり、適切な情報選択に基づく意思決定をしたりすることが困難になる状況のことを一般に「情報オーバーロード」とよぶ。WWWだけでなくSNSや動画共有サイトを含めてあらゆる情報があふれる現代のデジタル・メディア環境においては、この情報オーバーロードが常態化しているといえるだろう。メディア研究者のアレクサンダー・ハラヴェは、このような社会環境にける検索エンジンの役割を、「探す」技術であるのと同時に「Xする」技術であると論じている。すなわち、情報オーバーロード環境においては、何か見つけ出すというよりも、何を「Xする」のが重要な点になるということだ。

これは、インターネット上で利用可能な情報量がいくら増加しても、人間の身体が情報を処理できる量は増えない、というある意味当たり前の非対称性によるものだ。このような人間の情報処理の容量のことを「認知資源」とよび、ほとんど無限に供給される情報に対して、人間は限られた資源である「認知」を特定の情報に選択的に振り分ける必要に迫られる。検索エンジンのよう

な選別アルゴリズムは、人間が認知資源を振り向ける対象と X する対象の選択を可能にする重要な社会的方策だということである。

社会学者のマイケル・ゴールドハーバーは、認知資源という制約のもとで稀少となった人々の「アテンション」が競争の対象となった状況を「アテンション・エコノミー（注意経済）」という概念で指し示した。

インターネットの「プラットフォーム化」が進行した現実のデジタル・メディア環境は、UGCによってさらに情報流通量が増大し、このアテンション・エコノミーの原理がますます強まっていると言えるだろう。すなわちインターネット上において重要とされることは、いかに接続するユーザーのアテンションを惹きつけられるか、であり、それはいかに「質の高い」情報を提供するか、よりも優先されるということだ。なぜなら、アテンションを惹きつけられないということはその情報が X されるということであり、存在に気づかれない以上は、その情報の「質」をいかに高めても無意味だとみなされてしまうからだ。

1 だからこそ、様々なプラットフォームのアルゴリズムが、情報の I や II ではなく、アクセス数やCTR（ク

リック率）、コンバージョン・レートなどのアテンションの獲得と直結したKPI^{（注1）}に対して最適化されているのである。アテンション・エコノミーという経済状況において自社の収益をあげるためには、まずユーザーの稀少なアテンションを獲得することが必要条件なのだ。

この人間のアテンションに対する最適化は、人間がもつ心理特性と重なり合うことで、ときにより複雑で厄介な問題にもつながる。 2

心理学者・行動経済学者のダニエル・カーネマンは、人間の二つの思考過程を「速い思考」と「遅い思考」と分類し、「速い思考」を実現する脳のシステムを「システム1」、遅い思考を実現する脳のシステムを「システム2」とよんで区別している。

システム1の「速い思考」とは、自動的・直感的に素早く判断する思考モードのことを指す。例えば、突然聞こえた音の方向を感知して、特に意識することなく自然とアテンションを向けてしまうようなプロセスが「速い思考」で、いわば意識的なコント

ルールが及ぶ前の「反応」などが含まれる。

3

一方の「遅い思考」とは、複雑な計算のように意識的に時間をかけて論理的な推論などを行う思考モードのことで、例えば聞こえた声の内容を言語的に判断して、その真偽を吟味して、確かめるようなことを指す。実際はこのシステム1（速い思考）とシステム2（遅い思考）は連携して処理をするが、システム1が自動的にアテンションの対象を振り分ける（音が聞こえた方向に気づかせる）のに対して、システム2はその対象にどのように対処すべきかを意識的に判断する（聞こえた音にどのように応答するかを考える）というような過程をたどる。

4

この「二重過程理論」を含む人間の情報処理過程にはさまざまな理論があるが、システム1のような認知資源の節約につながる情報処理方略のことを「ヒューリスティック」とよぶ。ヒューリスティックは直感や経験則に基づいて、すばやい判断を行う思考様式で、例えば「ちゃんとした根拠はないが」パツと見た目が外国人にみえるから日本語が通じないだろうと判断する」といった短絡的な判断のことを指す。

少し考えればわかる通り、^Cこうした判断は日常生活において認知資源を使わずに素早く行動を決めていく際には一定の有効性があるが、偏見や差別を拡大したり、論理的でない判断をしたりしてしまう危険性と表裏一体である。^Dヒューリスティックは必ずしも悪いものではないが、情報の真偽の判断など慎重さを要する場面ではヒューリスティックが邪魔をすることもあるわけだ。このようなヒューリスティックなどによって判断が偏ったり論理的でなくなったりする心理的な傾向性のことは「認知バイアス」と総称される。

認知バイアスのうちよく知られているもののひとつに「確証バイアス」というものがある。これは自分の信念に合致する情報を過大評価し、合致しない情報を過小評価するという心的傾向のことである。より分かりやすくいえば、人間は「信じたいものを信じ、信じたくないものを信じない」という判断をしやすいくことだ。一例を挙げると、自分が支持している、あるいは好きなユーチューバーが主張していることは根拠がなくても真実だと思い込みやすく、逆にそのユーチューバーに批判的なコメントがつくと、たとえそれが論理的に妥当なものであってもその正しさを認めることができないことがある。そして多くの場合、

そのような確証バイアスに基づいて自分に都合のいい情報だけに選択的にアテンションを向けていること自体に気づかないのだ。

そうした人間の心理的傾向に対して、SNSなどのプラットフォームは、アルゴリズムによってユーザーのCTRや滞在時間が最大化するような情報を選択して提示する。ユーザーが「信じたい」と思う情報の方が、よりCTRが高ければ、そのような情報を（たとえそれが真実であろうとなかろうと）^④頻繁に表示するようにアルゴリズムが勝手に最適化してしまうわけだ。アルゴリズムと認知バイアスの相互作用によって、たとえ真偽が不明であってもユーザー（のシステム1）にとって「心地よい」情報だけが選別されたメディア環境が構築されていくことになる。

このように、アルゴリズムという一見「Ⅲ」「Ⅳ」な処理は、アテンション・エコノミーという経済原理のもと、プラットフォームのKPIに対して忠実に最適化を進めることで、かえってそのアルゴリズムが出力する情報の分布や真偽が不明確になってしまうという逆説を抱えることになる。これは、アテンションに最適化したアルゴリズムと、人間のシステム1による「速い思考」が、良い意味でも悪い意味でも「相性がよい」ためでもある。情報オーバーロード環境において、認知資源の節約が可能なシステム1による「速い思考」で情報を処理することは効率的である一方、システム2による「遅い思考」を積極的に働かせて情報の真偽を吟味したり論理的に熟考したりすることは「コスパ」が悪いことになってしまうからだ。

アルゴリズムは、情報オーバーロードにおける過剰な情報量を縮減すべく、フィルタリングやレコメンドを行い、タイムラインなどの認知しやすいフォーマットにあらはじめ整序してくれる。いつてみれば、アルゴリズムが選別してくれた情報をそのまま「深く考えずに」直感的に受け入れることが、脳にとつてもつとも情報処理の負荷を小さくできるわけだ。しかしこれまで見てきた通り、そこに身をまかせることには様々な弊害が伴う。そのようなアルゴリズムと人間のある意味「共犯」ともいえるような相互関係について俯瞰的・批判的な視座をもつことは、アテンション・エコノミーを相対化するために重要な第一歩と言えるだろう。

（宇田川敦史『アルゴリズム・AIを疑う』による。一部改変。）

(注) 1 重要業績評価指標のこと。事業等の目標を達成するために、各プロセスを定量的に評価して進捗状況を可視化したものこと。

問一 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部Aで筆者は「この「信頼」とはどういったものだろうか。そしてその「信頼」には果たして十分な根拠があるといえるのだろうか」と問いかけている。これらの二つの問いに対する筆者の答えが書かれている段落を本文中から二か所見つけ、それぞれの最初の五字を書き抜きなさい。ただし、解答の順序は問わない。

問三 傍線部Bの「アテンション・エコノミー」とは何か。最も適切な説明をア～オのなかから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 情報だけでなく、生産、流通、消費といった経済活動のすべての側面において広告やコンテンツ閲覧が同程度になるよう競争を制限する経済の仕組み。

イ 情報の流通量に注意を払い、情報選択に基づく私たちの意思決定が困難になることを防ぐために、アルゴリズムを使って情報流通量を制限することで、安定的な経済活動を作ろうとする経済的方策。

ウ 情報の質の高さで競争を促し、私たちが正しいことに注意が払えるようになることで、社会経済活動が活発になるという概念。

エ 私たちの注意が経済的価値を持つことを指し、広告からの収入やコンテンツの閲覧回数などが、経済的な利益につながる仕組み。

オ アルゴリズムに注意を向け、それを「ブラックボックス」ではなく「認知資源」として活用し利益につなげることを目指す経済の仕組み。

問四

X

に入る最も適当な言葉をア～オのなかから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 信 頼

イ 無 視

ウ 認 識

エ 確 認

オ 注 意

問五 次の文は本文中の空欄

1

4

のいずれかに入る。文脈に照らしてどこに入れるのが最も適当か。一つ選

び、その記号を書きなさい。

ここでは、心理学の分野でしばしば参照される「二重過程理論」という理論モデル(あくまで仮説的なモデルであり、実際の脳の機能はもっと複雑なものとされる)を確認しておこう。

問六

傍線部Cの「こうした判断」は何を指しているか。本文中から九字で書き抜きなさい。

問七

傍線部Dの「表裏一体」の文中での意味として最も適当なものをア～エのなかから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 感情的に深く結びつき、一つであるかのように行動する状態。

イ どちらか一方を欠くと、もう一方も存在しない、あるいは存在できなくなる関係。

ウ 一見すると対立している、もしくははへだたっているように見える事柄が、実際は密接な関係にあること。

エ 見えない箇所で起こっているプラス面とマイナス面が相互関係にあり、一体となっているさま。

問八

い。

I

II

III

IV

に入る最も適当な語句をア～エのなかから一つ選び、その記号を書きなさい。

I	ア 信頼性	イ 耐久性	ウ 神秘性	エ 恒常性
II	ア 多様性	イ 耐水性	ウ 日常性	エ 正確性
III	ア 心理的	イ 主観的	ウ 客観的	エ 排他的
IV	ア 横断的	イ 直感的	ウ 機械的	エ 感覚的

問九 傍線部Eに「アルゴリズムと人間のある意味「共犯」ともいえるような相互関係」とあるが、ここでいう「共犯」とはどのようなことか。

「最適化」、「真偽」、「確証バイアス」の三つの語句を用いて、五十文字以上五十五字以内で書きなさい。

問題二 次の文章は、マレーシアのボルネオ島に暮らす狩猟採集民、プナンの学びと学校に関する文章である。本文を読んで、後の問いに答えなさい。

プナンは現在、サラワク州政府の定住化政策によって、ブラガ川上流域に住んでいます。もともとはボルネオ島の熱帯雨林の中でも限られた地域である、ウスン・アバウと呼ばれている地域の森を遊動して暮らしていました。定住化政策は一九八〇年代初頭に行われ、一九八三年にブラガ川上流に小学校が建てられました。プナンの子どもたちは、近隣に暮らす焼畑稲作民クニヤーの子どもたちとともに、学校に通うようになったのです。

校舎があつて先生がいて、教室で黒板を用いて、教科書を読みながら物事を教わるというのは、プナンにとっては全く初めての経験することでした。当時、小学校の一期生になったプナンから聞くと、それは彼らにとって、実に驚くべきものだったと言います。何が行われているのか分からず、なじむこともできなかったようで、いつの間にか学校に行かなくなった子が多かったようです。教室では、「ずっと座っているだけだった」し、「^①勇猛な(恐い)先生がいた」と、プナンは当時のことを回想してくれました。

I それから四〇年が経過して、プナンの学校への定着率は最初期からそれ程大きく変わっていないようです。ブラガ川上流域には、五〇〇人ほどのプナンの共同体があつて、毎年数十人の子どもが小学校に上がります。その小学校に限って言えば、この四〇年間でそこを卒業したプナンは、近年はやや増えてきているものの、せいぜい三〇〇四〇人です。多くの場合は低学年のうちに学校に行くのを止めます。中には、最初から学校には行かない子もいます。

ブラガ川上流域の小学校を卒業した生徒たちは、県庁所在地にある寄宿舎付き中学校に進学することができますが、この四〇年間で、中学校に進んだプナンはひとりもいません。それに対して、プナンと同じ小学校に通っている焼畑稲作民クニヤーは、小学校卒だけでなく、すでにたくさんの中卒者、高卒者、さらには、大卒者たちを輩出しています。

プナンにとっては森の中で暮らすことが

a

であり、遠く離れた場所に長らく滞在することを毛嫌ひすることがひとつ

の原因でしょう。プナンは学校教育を受けることに価値を見出していないのだと言うこともできるのかもしれませんが。因数分解や二次関数ができたとしても、目の前にある暮らしに何の役にも立たないし、英会話ができたところで、外国人でも来ない限り、森の中ではほとんど使う場面がないのです。プナンがそう言ったわけではありませんが、突き詰めて言えば、そういうことだと言えます。

II 小学校に行けば忘れ物をしてだけで先生に怒られるし、宿題をやつてこなくても先生に怒られるし、学校とはろくなどころではないというのが、プナンの率直な考えであるように思えます。彼らはそうはつきりとは言いませんが、あえて代弁するとそうなるでしょう。

プナンがどう学校に向き合っていたのかをもう少し具体的に知るために、ここでは、プナンのある三人の兄妹を取り上げてみようと思います。二〇〇六年から二〇一〇年頃にかけてのことです。一九九一年生まれの長男ウマはすでに学齢期を過ぎていましたが、小学校に通ったことはなかったようです。そのため、文字も読めません。当時一〇代の後半で、オバの作った菓子を販売しようとしていたので私も資金を出したのですが、簡単な計算もできず、商売のようなものを始めたのにすぐにやめてしまいました。

長女のアアンは、二〇〇五年から小学校に通うようになり、二〇一〇年には卒業しました。マレー語ができるようになり、英語も少しできるようになったようです。

次男のロベットは、二〇〇七年から小学校に通い始めました。彼は、二年生の時にクニャーの生徒にいじめられました。靴を履かず、毎日裸足だった^②ので、それをからかわれたのです。いじめられていたロベットは学校に行きたくないという理由で、学校に通うのを止めました。その子はそれから、親の行動につねに同行するようになりました。森に行つて遊び、冒険し、時には親の手伝いをしていました。親は、そのことを苦にしたり、悩んだりすることはありませんでした。

ただ、姉のアアンが最初に学校に通っていた時期だったので、学校でいじめがあることに対しては、ロベットの父は遺憾だ^③と思つていました。学校は何かを学びに行く場所です。それにもかかわらず、反対にいじめなどの問題が起きているのだ

とすると、そんな b をはらんだ場に子どもを通わせなくてもいいと、ロベットの父親は考えているようでした。
プナン社会は親子関係が密接で、子どもは親の膝もとで生きてゆく術をゆつくりじつくりと学びます。大きくなってからも親たちの近くで暮らす傾向にあります。

プナンの親たちは、子どもが外の世界を経験することを奨励し、共同体の外部で知識と技術を体得させることによって、子どもを大人にするということはありません。日本では c とも言いますが、プナンにそのような発想はまったくないのです。親は子どもたちといつも一緒にいて、狩猟や採集の仕方を含め、薪の割り方、火の熾し方、小屋の建て方など、狩猟採集の民として、森の中で生きていく上で必要となる様々な事柄を自ら身につけさせるのです。

^B 教えるというではありません。どちらかと言うと、ゆつくりと時間をかけて、子どもたちに染み込ませるように、様々な能力や知識を身につけさせると言うことができるでしょう。

サラワク州政府は現在、教科書や給食費を無料にしたり、寄宿中学校に無料で通えるようにしたりして、プナンを優遇する教育政策を取っています。マレーシア連邦政府も、「貧しい家の生徒に対する資金(Kumpulan Wang Amanah Pelajar Miskin)」と名づけて、プナンを含む貧困家庭に対して教育支援金を支給しています。それらの行政施策に加え小学校教員たちはプナンに対して、学校に通う機会を増やすように働きかけを強めています。

III 寮に無料で寄宿し、朝食と昼食が出て、教育支援金が出されたとしても、プナンは学校に行きたがらないのです。父母や家族から離れてそんなことをしたくないというのが、プナンの本音です。貧しくて行けないではありません。働かなければならないから行けないのではありません。プナンの子どもたちは、行きたくないから行かないのです。親たちは、子どもが行きたくなければ、学校に無理に行かせようとは思いません。そのように、プナン社会には、学校教育が定着しないのです。私は小学校の教師たちにインタヴューをしたこともあります。彼らは、私が高等教育をうけて大学教員をやっているために、自分達と同じ意見を共有しているだろうと思ひ込んでいたようで、私の前でプナンの子どもたちが学校に通わないことを嘆く場面がしばしばありました。いわく、なぜ、プナンは学校に来ないのか。どうすれば、プナンの「不登校」を改めさせることができ

るか。小学校に入ったとしても、早ければ数カ月か一年ほどで小学校に行かなくなるし、学年が上がるにつれて通学を放棄する割合も高くなる。これでは、マレーシア国民として生きていく上で彼らの将来は明るくない。そういったことを伝えてきました。

しかし先ほども述べたように、プナンの親たちは子どもたちの「不登校」を憂慮することなどありません。ましてや、学校で一生懸命勉強をして、立派な社会人にならなさいと言うことなどありません。子どもたちが、学校に行きたくなければ行かなくてもいいというのが、プナンの親たちの考えなのです。

子どもにとっても、親の狩猟キャンプについて行って狩られた動物のさばき方を見たり仕事を手伝ったり、魚釣りをしたり、果実を取りに出かけたりすることのほうが、それなりに苦労や問題もあるけれど、現実役に立つし、楽しいし、よっぽど将来のためになるのです。そういった意見をプナンたち自身は述べることはありませんが、プナンの親たちも子どもたちもよく知っているように思えます。

その意味では、プナンにとつての学校は森の中にあるのです。プナンの狩猟小屋の生活を見ていけば、子どもたちが小学校に行かない、また卒業する数が少ないということに、自然と得心がいきます。すでに述べたように、プナンは森を遠く離れることを嫌うため、遠くに長いあいだ出稼ぎに行くようなこともありません。これまで都市生活をするプナンにお目にかかったことはないですし、彼らにとつては、一生涯森の周囲で暮らすのがふつうなのです。

私たちが暮らす現代日本では、「いじめ」や「不登校」の問題をはじめとして、学校教育が抱え込んでいる問題と教育の再生が、大きな社会問題となつてすでに久しいと言えるでしょう。言い換えれば、知識習得や人格形成の場として存在するはずの学校が、現状としては、「負」の社会問題を生みだす場となつています。もしプナンが日本にいて、学校が社会問題化するほどネガティブな場であることを知れば、子どもたちを学校に通わせないことは間違いないと思われれます。

学校が生みだす問題に対して、「学校に行かなければいい」というオプシオンが、教育をめぐる社会的・歴史的な背景をプナンとは異にする日本では、学校に行かないことが何の解決にもならないことはよく分かっています。不登校児を学校から切り離し

て森に送り込むという解決も、日本では通用しません。

しかしだからこそ、現代日本の教育をめぐる今日の実践的な議論からはすっぱりと抜け落ちているものがあるように感じられるのです。それは、「教育とは何か、学校とはそもそも何なのか」を根本から問うことに他なりません。

哲学者ミシェル・フーコーは、かつて著書『監獄の誕生』の中で、「監獄」や「病院」と並んで「学校」が、近代的な「権力」の典型であることを指摘しました。フーコーによれば、大衆教育は、学校の建設や教師のまなざし、試験制度など、生徒を近代人として育て上げるための「規律訓練」のテクノロジーの中に立ち現れたのです。

現代のプナンの学校に対する態度は、「近代以前」の生活の断片にすぎないのかもしれませんが。しかし、学校に対してア・プリオリに（経験以前に）期待も評価もしない態度がこの地球上に現に存在することは、重く受け止められるべきではないでしょうか。今一度、近代以降に広く浸透し、様々な問題を抱え込んでしまった学校教育制度について問い直してみるべきではないでしょうか。

ここで、プナンの学校教育に対する態度とは、結局、いかなるものだったのかを振り返っておきましょう。学校の存在意義を感じない、学校の価値を高いものと認めていないプナンは、近代以降の社会において、私たちが容易に抗うことができないようなイデオロギーに対して、正面切って歯向かうのではなく、むしろ相手にさえしていないように私には思われます。学校に行かないと面と向かって抵抗する「以前」に、そんなに必要とは思えないから行かないし、積極的には利用しないともいうかのような態度に私は、一条の希望の光のようなものがあるのではないかとさえ感じてしまいます。

まじめに学校に行つて勉強しなければならないというのは、民主主義社会の一員として選挙に行つて投票しなければならないとか、地球に生きるはしくれとして地球温暖化の危機を何とかしなければならぬなどの、近代的な価値づけの上に成り立っている態度です。それらは、個人の思考とは別に、外部から個人のもとにやって来るものであり、今日ではほとんど自明視されて揺らぐことのないような「神々しい」までの価値観です。

プナンの振る舞いは、このような価値観に対して、根本的な疑問を投げかけているように思えるのです。それは、疑うとか疑

わなとか以前の断片的思考かもしれません。高潔な理想を掲げることによって世界を構成している強制的・半強制的な制度やルールに対する、無意識の次元の反意とでもいうべき態度だと言ってもいいかもしれません。私には、そのような物事が「立ち上がる以前の」問題感覚のようなものにこそ、当たり前すぎて気づかなかった日常をひっくり返して考えてみる手がかりがあるように思えるのです。

こうしたプナンのふるまいに、他の先住民の考え方や生き方を重ねてみましょう。自分たちに不幸や悪をもたらしているものの本質から逃れるためにアマゾン河の下流域を放浪し続けていた、南米・パラグアイの先住民グアラニの人たちの話です。フランスの人類学者ピエール・クラストルによると、グアラニの人たちは、病気や不条理、歪みや矛盾、不幸をもたらしてしまうようなものには近づかないようにしていたのだと言います。それは、あらゆるものを「一元化」する、(一)から成る近代社会の枠組みです。グアラニは、(一)から逃れて、不幸が廃絶された(多)から成る神話的世界を求めて、森の中をさ迷い歩いていたということです。

学校にやって来る生徒をみんな一様に「生徒」とみなして、校舎の中でしつけをしながら様々な物事を教えることにより、一元化していくような世界。そのような(一)から成る世界をグアラニは毛嫌いしたのです。学校から目を逸らし、一顧だにしないプナ人には、人間に不幸をもたらす世界の一元化を拒否するという、グアラニの人々と同じような直観があるとは考えられないでしょうか。

(奥野克巳『ひっくり返す人類学—生きづらさの「そもそも」を問う』による。一部改変。)

問一 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 空欄 a c に入る最も適当な語句を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- | | | | | |
|---|-----------|-------------------|----------------|---------|
| a | ア 普通 | イ 特別 | ウ 必須 | エ 異常 |
| b | ア 疑問 | イ 可能性 | ウ 矛盾 | エ 緊張 |
| c | ア 親の光は七光り | イ 負うた子に教えられて浅瀬を渡る | ウ かわいい子には旅をさせよ | エ 蛙の子は蛙 |

問三 傍線部A「ブナンのある三人の兄妹を取り上げてみようと思います」とあるが、本文において三人の兄妹の事例が意味することは何か。それを説明した次の文の空欄 X と Y に入る最も適当な言葉を指定された字数で本文から書き抜きなさい。

ブナンの親は、学校が、「いじめ」や「不登校」のような社会問題を引き起こすような X(五字) な場であるなら、学校に Y(十字) しない。

問四

傍線部B「教えるというわけではありません」について、次の(i)と(ii)の問いに答えなさい。

(i) プナンの子どもたちはどのように学んでいるのか。次のア～オのなかから最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 学校は嫌いであるため、親や兄姉から英語やマレー語などを自宅で学ぶ。

イ 自ら森に入り、森の内外で生きていくために必要なことを自力で学び取っていく。

ウ 森の中で親の保護下にありながら、森で生きていく上で必要な知識を短期間でつめこむ。

エ 親と共に森に入り、経験を重ねながら狩猟採集民として必要な知識と技能を体得する。

オ 親とは共に行動するが、親の影響は受けず自分が興味・関心をもったことを中心に学習していく。

(ii) 筆者が説明するプナンの学び方を日本に置き換えるとすれば、それはどのようなものか。次のア～カのなかから二つ選び、その記号を書きなさい。

ア 学校の教室で先生が黒板に書いたことをノートに書く。

イ 折り紙を折れるようになるために、本を見ながら実際に折ってみる。

ウ わからない数学の問題があるため、解き方を塾の先生に教えてもらう。

エ バットの振り方をYouTubeで見ながら、バットを振って実際にボールを打ってみる。

オ 歴史上の登場人物の名前を暗記する。

カ 学校の宿題である漢字ドリルと計算ドリルを終わらせる。

問五 次の文は本文中の空欄

 のいずれかに入る。文脈に照らしてどこに入れるのが最も適当か。一つ選
び、その記号を書きなさい。

しかし、今日に至るまで、フナンの「学校嫌い」は一向に改善される見込みはないように思えます。

問六 傍線部C「生徒を近代人として育て上げるための『規律訓練』とあるが、これは近代社会のどのような構造を指し示してい
るか。」「……の構造」とつながるように、本文から二十六字で抜き出し、その最初の五字を書き抜きなさい。

問七 傍線部D「根本的な疑問」とは何か。その内容にあたる箇所を本文から二十五字以上三十字以内で書き抜きなさい。

問題三

次の文章

A

D

は、一つの物語を冒頭から四つの場面にわけて記したものである。これらを読んで、後の問いに答

えなさい。なお、

B

D

の前後は適宜省略している。

A

文明の頃、泉州の堺に白水翁といへるものあり、よく人の禍福吉凶を決し、成敗興衰を指すこと差はず。常に大鳥の社(注1)の辺に行きて卜を売る。ある日一人の士(注2)ここに来たりて、其の卦を問ふ。白水翁其の年月日時を聞きて、卦を鋪き下し、考へを施して云ふ、「この卦占ひがたし。早く帰られよ」といふ。此の士心得ぬ体にて、「我が卦何のゆゑに卜ひがたき。察するに卦のいづる所よろしからず。あらはにしめしがたきことあるか。いむことなく示されよ」といふ。翁もとより言葉を飾らず、「拙道が卦による時は、貴君当に死し給ふべし」。此の士いふ、「人死せざる道理なし。我幾年の後か死すべき」。翁云ふ、「今年死し給はん」。「今年の中、幾の月に死すべき」。「今年今月死に給ふべし」。「今年今月幾日に死するや」。「今年今月今日死に給ふべし」。

此の人心中に怒を帯びて再び問ふ、「時刻は幾時ぞ」。「今夜三更子の時死に給はん」。

B

彼の卜を求めし侍は当所郡代の別官をうけ給はる、茅渟官平といふものなるが、家にかへりても、白水翁が言葉心にはさまり、面(注4)に憂容あるを、女房小瀬「何ごとによ。上司の気色ばし悪しかりしか」と問ふ。官平云ふ、「さやうのことならず。

今日陰陽師にうらかたを問ひしに、我が命今年今月今日、三更に死すべしと、かたく云ひぬ」。(中略) 小瀬打ちわらひ

て「それほど現然たる人の、何ゆゑに今夜死すべき。か様のけがらはしき言葉を、酒を飲みてわすれ給へ」と、其の日もくるるやくれず、官平は酒気を帯びて仮寝をすると、小瀬は使女安ををよびて (中略) 「主人今日陰陽師のうらかたを聞き

て、今夜三更に死すべしといひぬ。僮も聞きしやいなや」。安いふ、「われも今日傍より聞き侍りしが、何ゆゑに主人の死に給ふ事あらん。これ信(注5)とするにたらぬことなり」といふ。小瀬いふ、「我僮と今夜寝ずして、針線(注6)に夜を明かし、死するか死せぬかを守るべし。僮睡る事なかれ」と、笑ひながらいふ。 (中略) 更鼓を聞けば三更なり。 (中略) 忽ち官平が

寝間を飛びいで、中戸に走りいづる響に驚き、ねむりいる安を呼び起こし、ともに手燭を点じて、外門の戸の開くを追っかけ出でて見れば、官平白き服を着て、前へ走る足疾く、女の足に及びがたきあひだ、橋の上へあがると見えしが、水に飛びこむびき高く、漸う橋の上にいたり見れ共、海に近き川の水多き折ふしなれば、形もさだかならず流れ行く。

C

小瀬父親にむかつて心底を明し、「此の家にありて入舎の丈夫を迎ふる事ならば、せめて家をたつるを以て心やりとせん。他家に嫁し行くことは決して本意にあらず」といふ。(中略) 同じ国守の郡役をうけ給はる、岸の何某が弟に、権藤

太とて、郡方の取計にも能く馴れたるものありて、官平と常に出合ひしものなるが、此の事をききて、「茅渚の家に入つて相続せん」といふ。両親得心の上は否むべきにあらずと、何ごとも親のはからひにまかせ、権藤太を呼び入れ夫婦となり、名を官平と改めさせ、郡郷の役儀其の儘につとめ、茅渚の家を相続しける。

夫婦のあひだもよろしく、さきの官平は年少し耄けたるに、是は似合敷き夫婦なり。女房は徳とりたりと人々申し合ひける。或夜夫婦寝ねんとして、睡りがちなる使女を呼びて、酒を温めさせける。安睡たきままに、不肖ながら竈の辺によりしに、俄に此の竈ゆるめきて、地を離るること一尺ばかり、人ありて竈を頭にいただき、頭髮を披りかけ、舌をはき眼に血の涙を注ぎ、「安、安」と呼ぶ。(中略) 安いふ、「われ何心なく火を焼く所に、
X
の主人かしらがみを乱し、めのうち血を流して、我をよび給ふと見て、其の後は覚えず」といふ。

D

国守ひそかに官平が宅へ数人をつかはして、竈を毀ち見させられけるに(中略) 竈を取りのけぬるに、其の下に一塊の石あり。是をかきのけて見れば、一ツの井なり。井の内をさぐり見るに、一ツの屍ありて生けるがごとし。見しりたるものありていふ、「これこそ先の官平なり」といふ。(中略) やがて当官平夫婦に、此の事を責め問はれければ、つひには白状しける。此の当官平、権藤太と申せし時、
Y
権藤太髪を抜けて、面をかくし走り出て、

Z

人の思ひがけなく、彼の家に入贅して、夫婦となりしまで、二人の白状死罪のがれず。

(『英草紙』による。一部改変。)

(注) 1 ト——うらないのこと。

2 卦——算木・筮竹と呼ばれる木の棒・竹の棒を用いて占った結果、あらわれるかたち。このかたちを見て占い師は吉凶などを判断する。

3 三更子の時——三更、子の時、いずれもだいたい午前零時前後の二時間を指す。

4 陰陽師——ここでは単に占い師(白水翁)のことを指す。

5 針線——ここでは針仕事・裁縫を指す。

6 更鼓——夜中に時間を知らせるために打たれる太鼓。

7 家をたつる——ここでは茅渟の家を継承することを指す。

8 郡役——地方官。

9 国守——国の殿様。

問一 傍線部①「この卦占ひがたし。早く帰られよ」とあるが、この人物はなぜこのように述べたのか。この言葉を述べた人物を明示したうえで、その理由を段落 A から読み解き、「くため」とつづくように五〇字以内で書きなさい。

問二 傍線部②「何ゆゑに主人の死に給ふ事あらん」を現代語に訳しなさい。

問三 空欄 X に入る最も適当な漢字一字を本文から書き抜きなさい。

問四

空欄

Y

Z

には、次のア～カの文章を三つずつ並び替えたものが入る。空欄

Y

Z

を

完成させるために、次のア～カをそれぞれ適当な順に並び替えて、解答欄にそれらの記号を書きなさい。

ア ひそかに小瀬と計りて、竈を井の上にうつさせ、井を別所にうがちて、

イ 身を投げたる体にもてなし、其の身はかくれかへり、

ウ 小瀬とひそかに不儀をなし、人知るものなし。

エ 先官平卦をうらなうて家にかへる時、権藤太彼の家にかくれ居て、

オ 橋の辺にいたりて、大石一塊を把つて、橋の上より投げ下し、

カ 三更の前後酔ひふしたるをうかがひ、しめ殺して井の中に隠し沈め、

問五

本文中では省略しているが、

C

D

の間に、「国守」が不思議な夢を見る場面が描かれている。その夢は、髪を乱し

て、頭に井桁（井戸上部の縁を「井」の字に組んだ木の囲いのこと）をのせた人物が、眼から血の涙を流しながら国守に一枚の

書状を渡す、というものだった。その書状には、

要知三更事

可開

甲

下

乙

と記されていた。この文中の

甲

と

乙

には、漢字が一字ずつ入る。

甲

乙

に入る最も適当

な漢字を次のア～キのなかから一つ選び、それぞれの記号を書きなさい。

ア 日 イ 月 ウ 火 エ 水 オ 木 カ 金 キ 土

問題四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。

靈公与^ニ夫人^一夜坐^シ、聞^ク車声^ノ、麟^{リン}麟^{リン}至^リ闕^{ケツ}而止^ミ、過^{ギテ}闕復有^リ声^ノ。公問^{ヒテ}

夫人^ニ曰^ク、「知^{リテ}此謂^ヲ誰^ト。」夫人曰^ク、「此必^ズ蘧伯玉也^ト。」公曰^ク「何^ニ以^テ知^ル之^ヲ。」

夫人曰^ク、「妾聞^ク礼^ニ、^{（注2）}『下^リ公門^ニ式^ニ路馬^ニ』所以^レ広敬也^ヲ。夫忠臣与^ニ孝

子^一、不^メ下^ニ為^セ昭昭^{（注4）}信節^ヲ、不^メ下^ニ為^セ冥冥^{（注5）}一情^ヲ行^ヲ。蘧伯玉、衛之賢大夫也。

仁而有^リ智、敬^ス於事^ニ上^ニ。此其人^ノ、必^ズ不以^レ闇昧^ノ廢礼^ヲ。是以^テ知^ル之^ヲ。」公

使^{ムレバ}視^レ之^ヲ、果^{シテ}伯玉也^ト。公^一 ^{（注3）} ^{（注1）} ^{（注2）} ^{（注4）} ^{（注5）} ^{（注6）} ^{（注7）} ^{（注8）} ^{（注9）} ^{（注10）} ^{（注11）} ^{（注12）} ^{（注13）} ^{（注14）} ^{（注15）} ^{（注16）} ^{（注17）} ^{（注18）} ^{（注19）} ^{（注20）} ^{（注21）} ^{（注22）} ^{（注23）} ^{（注24）} ^{（注25）} ^{（注26）} ^{（注27）} ^{（注28）} ^{（注29）} ^{（注30）} ^{（注31）} ^{（注32）} ^{（注33）} ^{（注34）} ^{（注35）} ^{（注36）} ^{（注37）} ^{（注38）} ^{（注39）} ^{（注40）} ^{（注41）} ^{（注42）} ^{（注43）} ^{（注44）} ^{（注45）} ^{（注46）} ^{（注47）} ^{（注48）} ^{（注49）} ^{（注50）} ^{（注51）} ^{（注52）} ^{（注53）} ^{（注54）} ^{（注55）} ^{（注56）} ^{（注57）} ^{（注58）} ^{（注59）} ^{（注60）} ^{（注61）} ^{（注62）} ^{（注63）} ^{（注64）} ^{（注65）} ^{（注66）} ^{（注67）} ^{（注68）} ^{（注69）} ^{（注70）} ^{（注71）} ^{（注72）} ^{（注73）} ^{（注74）} ^{（注75）} ^{（注76）} ^{（注77）} ^{（注78）} ^{（注79）} ^{（注80）} ^{（注81）} ^{（注82）} ^{（注83）} ^{（注84）} ^{（注85）} ^{（注86）} ^{（注87）} ^{（注88）} ^{（注89）} ^{（注90）} ^{（注91）} ^{（注92）} ^{（注93）} ^{（注94）} ^{（注95）} ^{（注96）} ^{（注97）} ^{（注98）} ^{（注99）} ^{（注100）} ^{（注101）} ^{（注102）} ^{（注103）} ^{（注104）} ^{（注105）} ^{（注106）} ^{（注107）} ^{（注108）} ^{（注109）} ^{（注110）} ^{（注111）} ^{（注112）} ^{（注113）} ^{（注114）} ^{（注115）} ^{（注116）} ^{（注117）} ^{（注118）} ^{（注119）} ^{（注120）} ^{（注121）} ^{（注122）} ^{（注123）} ^{（注124）} ^{（注125）} ^{（注126）} ^{（注127）} ^{（注128）} ^{（注129）} ^{（注130）} ^{（注131）} ^{（注132）} ^{（注133）} ^{（注134）} ^{（注135）} ^{（注136）} ^{（注137）} ^{（注138）} ^{（注139）} ^{（注140）} ^{（注141）} ^{（注142）} ^{（注143）} ^{（注144）} ^{（注145）} ^{（注146）} ^{（注147）} ^{（注148）} ^{（注149）} ^{（注150）} ^{（注151）} ^{（注152）} ^{（注153）} ^{（注154）} ^{（注155）} ^{（注156）} ^{（注157）} ^{（注158）} ^{（注159）} ^{（注160）} ^{（注161）} ^{（注162）} ^{（注163）} ^{（注164）} ^{（注165）} ^{（注166）} ^{（注167）} ^{（注168）} ^{（注169）} ^{（注170）} ^{（注171）} ^{（注172）} ^{（注173）} ^{（注174）} ^{（注175）} ^{（注176）} ^{（注177）} ^{（注178）} ^{（注179）} ^{（注180）} ^{（注181）} ^{（注182）} ^{（注183）} ^{（注184）} ^{（注185）} ^{（注186）} ^{（注187）} ^{（注188）} ^{（注189）} ^{（注190）} ^{（注191）} ^{（注192）} ^{（注193）} ^{（注194）} ^{（注195）} ^{（注196）} ^{（注197）} ^{（注198）} ^{（注199）} ^{（注200）} ^{（注201）} ^{（注202）} ^{（注203）} ^{（注204）} ^{（注205）} ^{（注206）} ^{（注207）} ^{（注208）} ^{（注209）} ^{（注210）} ^{（注211）} ^{（注212）} ^{（注213）} ^{（注214）} ^{（注215）} ^{（注216）} ^{（注217）} ^{（注218）} ^{（注219）} ^{（注220）} ^{（注221）} ^{（注222）} ^{（注223）} ^{（注224）} ^{（注225）} ^{（注226）} ^{（注227）} ^{（注228）} ^{（注229）} ^{（注230）} ^{（注231）} ^{（注232）} ^{（注233）} ^{（注234）} ^{（注235）} ^{（注236）} ^{（注237）} ^{（注238）} ^{（注239）} ^{（注240）} ^{（注241）} ^{（注242）} ^{（注243）} ^{（注244）} ^{（注245）} ^{（注246）} ^{（注247）} ^{（注248）} ^{（注249）} ^{（注250）} ^{（注251）} ^{（注252）} ^{（注253）} ^{（注254）} ^{（注255）} ^{（注256）} ^{（注257）} ^{（注258）} ^{（注259）} ^{（注260）} ^{（注261）} ^{（注262）} ^{（注263）} ^{（注264）} ^{（注265）} ^{（注266）} ^{（注267）} ^{（注268）} ^{（注269）} ^{（注270）} ^{（注271）} ^{（注272）} ^{（注273）} ^{（注274）} ^{（注275）} ^{（注276）} ^{（注277）} ^{（注278）} ^{（注279）} ^{（注280）} ^{（注281）} ^{（注282）} ^{（注283）} ^{（注284）} ^{（注285）} ^{（注286）} ^{（注287）} ^{（注288）} ^{（注289）} ^{（注290）} ^{（注291）} ^{（注292）} ^{（注293）} ^{（注294）} ^{（注295）} ^{（注296）} ^{（注297）} ^{（注298）} ^{（注299）} ^{（注300）} ^{（注301）} ^{（注302）} ^{（注303）} ^{（注304）} ^{（注305）} ^{（注306）} ^{（注307）} ^{（注308）} ^{（注309）} ^{（注310）} ^{（注311）} ^{（注312）} ^{（注313）} ^{（注314）} ^{（注315）} ^{（注316）} ^{（注317）} ^{（注318）} ^{（注319）} ^{（注320）} ^{（注321）} ^{（注322）} ^{（注323）} ^{（注324）} ^{（注325）} ^{（注326）} ^{（注327）} ^{（注328）} ^{（注329）} ^{（注330）} ^{（注331）} ^{（注332）} ^{（注333）} ^{（注334）} ^{（注335）} ^{（注336）} ^{（注337）} ^{（注338）} ^{（注339）} ^{（注340）} ^{（注341）} ^{（注342）} ^{（注343）} ^{（注344）} ^{（注345）} ^{（注346）} ^{（注347）} ^{（注348）} ^{（注349）} ^{（注350）} ^{（注351）} ^{（注352）} ^{（注353）} ^{（注354）} ^{（注355）} ^{（注356）} ^{（注357）} ^{（注358）} ^{（注359）} ^{（注360）} ^{（注361）} ^{（注362）} ^{（注363）} ^{（注364）} ^{（注365）} ^{（注366）} ^{（注367）} ^{（注368）} ^{（注369）} ^{（注370）} ^{（注371）} ^{（注372）} ^{（注373）} ^{（注374）} ^{（注375）} ^{（注376）} ^{（注377）} ^{（注378）} ^{（注379）} ^{（注380）} ^{（注381）} ^{（注382）} ^{（注383）} ^{（注384）} ^{（注385）} ^{（注386）} ^{（注387）} ^{（注388）} ^{（注389）} ^{（注390）} ^{（注391）} ^{（注392）} ^{（注393）} ^{（注394）} ^{（注395）} ^{（注396）} ^{（注397）} ^{（注398）} ^{（注399）} ^{（注400）} ^{（注401）} ^{（注402）} ^{（注403）} ^{（注404）} ^{（注405）} ^{（注406）} ^{（注407）} ^{（注408）} ^{（注409）} ^{（注410）} ^{（注411）} ^{（注412）} ^{（注413）} ^{（注414）} ^{（注415）} ^{（注416）} ^{（注417）} ^{（注418）} ^{（注419）} ^{（注420）} ^{（注421）} ^{（注422）} ^{（注423）} ^{（注424）} ^{（注425）} ^{（注426）} ^{（注427）} ^{（注428）} ^{（注429）} ^{（注430）} ^{（注431）} ^{（注432）} ^{（注433）} ^{（注434）} ^{（注435）} ^{（注436）} ^{（注437）} ^{（注438）} ^{（注439）} ^{（注440）} ^{（注441）} ^{（注442）} ^{（注443）} ^{（注444）} ^{（注445）} ^{（注446）} ^{（注447）} ^{（注448）} ^{（注449）} ^{（注450）} ^{（注451）} ^{（注452）} ^{（注453）} ^{（注454）} ^{（注455）} ^{（注456）} ^{（注457）} ^{（注458）} ^{（注459）} ^{（注460）} ^{（注461）} ^{（注462）} ^{（注463）} ^{（注464）} ^{（注465）} ^{（注466）} ^{（注467）} ^{（注468）} ^{（注469）} ^{（注470）} ^{（注471）} ^{（注472）} ^{（注473）} ^{（注474）} ^{（注475）} ^{（注476）} ^{（注477）} ^{（注478）} ^{（注479）} ^{（注480）} ^{（注481）} ^{（注482）} ^{（注483）} ^{（注484）} ^{（注485）} ^{（注486）} ^{（注487）} ^{（注488）} ^{（注489）} ^{（注490）} ^{（注491）} ^{（注492）} ^{（注493）} ^{（注494）} ^{（注495）} ^{（注496）} ^{（注497）} ^{（注498）} ^{（注499）} ^{（注500）} ^{（注501）} ^{（注502）} ^{（注503）} ^{（注504）} ^{（注505）} ^{（注506）} ^{（注507）} ^{（注508）} ^{（注509）} ^{（注510）} ^{（注511）} ^{（注512）} ^{（注513）} ^{（注514）} ^{（注515）} ^{（注516）} ^{（注517）} ^{（注518）} ^{（注519）} ^{（注520）} ^{（注521）} ^{（注522）} ^{（注523）} ^{（注524）} ^{（注525）} ^{（注526）} ^{（注527）} ^{（注528）} ^{（注529）} ^{（注530）} ^{（注531）} ^{（注532）} ^{（注533）} ^{（注534）} ^{（注535）} ^{（注536）} ^{（注537）} ^{（注538）} ^{（注539）} ^{（注540）} ^{（注541）} ^{（注542）} ^{（注543）} ^{（注544）} ^{（注545）} ^{（注546）} ^{（注547）} ^{（注548）} ^{（注549）} ^{（注550）} ^{（注551）} ^{（注552）} ^{（注553）} ^{（注554）} ^{（注555）} ^{（注556）} ^{（注557）} ^{（注558）} ^{（注559）} ^{（注560）} ^{（注561）} ^{（注562）} ^{（注563）} ^{（注564）} ^{（注565）} ^{（注566）} ^{（注567）} ^{（注568）} ^{（注569）} ^{（注570）} ^{（注571）} ^{（注572）} ^{（注573）} ^{（注574）} ^{（注575）} ^{（注576）} ^{（注577）} ^{（注578）} ^{（注579）} ^{（注580）} ^{（注581）} ^{（注582）} ^{（注583）} ^{（注584）} ^{（注585）} ^{（注586）} ^{（注587）} ^{（注588）} ^{（注589）} ^{（注590）} ^{（注591）} ^{（注592）} ^{（注593）} ^{（注594）} ^{（注595）} ^{（注596）} ^{（注597）} ^{（注598）} ^{（注599）} ^{（注600）} ^{（注601）} ^{（注602）} ^{（注603）} ^{（注604）} ^{（注605）} ^{（注606）} ^{（注607）} ^{（注608）} ^{（注609）} ^{（注610）} ^{（注611）} ^{（注612）} ^{（注613）} ^{（注614）} ^{（注615）} ^{（注616）} ^{（注617）} ^{（注618）} ^{（注619）} ^{（注620）} ^{（注621）} ^{（注622）} ^{（注623）} ^{（注624）} ^{（注625）} ^{（注626）} ^{（注627）} ^{（注628）} ^{（注629）} ^{（注630）} ^{（注631）} ^{（注632）} ^{（注633）} ^{（注634）} ^{（注635）} ^{（注636）} ^{（注637）} ^{（注638）} ^{（注639）} ^{（注640）} ^{（注641）} ^{（注642）} ^{（注643）} ^{（注644）} ^{（注645）} ^{（注646）} ^{（注647）} ^{（注648）} ^{（注649）} ^{（注650）} ^{（注651）} ^{（注652）} ^{（注653）} ^{（注654）} ^{（注655）} ^{（注656）} ^{（注657）} ^{（注658）} ^{（注659）} ^{（注660）} ^{（注661）} ^{（注662）} ^{（注663）} ^{（注664）} ^{（注665）} ^{（注666）} ^{（注667）} ^{（注668）} ^{（注669）} ^{（注670）} ^{（注671）} ^{（注672）} ^{（注673）} ^{（注674）} ^{（注675）} ^{（注676）} ^{（注677）} ^{（注678）} ^{（注679）} ^{（注680）} ^{（注681）} ^{（注682）} ^{（注683）} ^{（注684）} ^{（注685）} ^{（注686）} ^{（注687）} ^{（注688）} ^{（注689）} ^{（注690）} ^{（注691）} ^{（注692）} ^{（注693）} ^{（注694）} ^{（注695）} ^{（注696）} ^{（注697）} ^{（注698）} ^{（注699）} ^{（注700）} ^{（注701）} ^{（注702）} ^{（注703）} ^{（注704）} ^{（注705）} ^{（注706）} ^{（注707）} ^{（注708）} ^{（注709）} ^{（注710）} ^{（注711）} ^{（注712）} ^{（注713）} ^{（注714）} ^{（注715）} ^{（注716）} ^{（注717）} ^{（注718）} ^{（注719）} ^{（注720）} ^{（注721）} ^{（注722）} ^{（注723）} ^{（注724）} ^{（注725）} ^{（注726）} ^{（注727）} ^{（注728）} ^{（注729）} ^{（注730）} ^{（注731）} ^{（注732）} ^{（注733）} ^{（注734）} ^{（注735）} ^{（注736）} ^{（注737）} ^{（注738）} ^{（注739）} ^{（注740）} ^{（注741）} ^{（注742）} ^{（注743）} ^{（注744）} ^{（注745）} ^{（注746）} ^{（注747）} ^{（注748）} ^{（注749）} ^{（注750）} ^{（注751）} ^{（注752）} ^{（注753）} ^{（注754）} ^{（注755）} ^{（注756）} ^{（注757）} ^{（注758）} ^{（注759）} ^{（注760）} ^{（注761）} ^{（注762）} ^{（注763）} ^{（注764）} ^{（注765）} ^{（注766）} ^{（注767）} ^{（注768）} ^{（注769）} ^{（注770）} ^{（注771）} ^{（注772）} ^{（注773）} ^{（注774）} ^{（注775）} ^{（注776）} ^{（注777）} ^{（注778）} ^{（注779）} ^{（注780）} ^{（注781）} ^{（注782）} ^{（注783）} ^{（注784）} ^{（注785）} ^{（注786）} ^{（注787）} ^{（注788）} ^{（注789）} ^{（注790）} ^{（注791）} ^{（注792）} ^{（注793）} ^{（注794）} ^{（注795）} ^{（注796）} ^{（注797）} ^{（注798）} ^{（注799）} ^{（注800）} ^{（注801）} ^{（注802）} ^{（注803）} ^{（注804）} ^{（注805）} ^{（注806）} ^{（注807）} ^{（注808）} ^{（注809）} ^{（注810）} ^{（注811）} ^{（注812）} ^{（注813）} ^{（注814）} ^{（注815）} ^{（注816）} ^{（注817）} ^{（注818）} ^{（注819）} ^{（注820）} ^{（注821）} ^{（注822）} ^{（注823）} ^{（注824）} ^{（注825）} ^{（注826）} ^{（注827）} ^{（注828）} ^{（注829）} ^{（注830）} ^{（注831）} ^{（注832）} ^{（注833）} ^{（注834）} ^{（注835）} ^{（注836）} ^{（注837）} ^{（注838）} ^{（注839）} ^{（注840）} ^{（注841）} ^{（注842）} ^{（注843）} ^{（注844）} ^{（注845）} ^{（注846）} ^{（注847）} ^{（注848）} ^{（注849）} ^{（注850）} ^{（注851）} ^{（注852）} ^{（注853）} ^{（注854）} ^{（注855）} ^{（注856）} ^{（注857）} ^{（注858）} ^{（注859）} ^{（注860）} ^{（注861）} ^{（注862）} ^{（注863）} ^{（注864）} ^{（注865）} ^{（注866）} ^{（注867）} ^{（注868）} ^{（注869）} ^{（注870）} ^{（注871）} ^{（注872）} ^{（注873）} ^{（注874）} ^{（注875）} ^{（注876）} ^{（注877）} ^{（注878）} ^{（注879）} ^{（注880）} ^{（注881）} ^{（注882）} ^{（注883）} ^{（注884）} ^{（注885）} ^{（注886）} ^{（注887）} ^{（注888）} ^{（注889）} ^{（注890）} ^{（注891）} ^{（注892）} ^{（注893）} ^{（注894）} ^{（注895）} ^{（注896）} ^{（注897）} ^{（注898）} ^{（注899）} ^{（注900）} ^{（注901）} ^{（注902）} ^{（注903）} ^{（注904）} ^{（注905）} ^{（注906）} ^{（注907）} ^{（注908）} ^{（注909）} ^{（注910）} ^{（注911）} ^{（注912）} ^{（注913）} ^{（注914）} ^{（注915）} ^{（注916）} ^{（注917）} ^{（注918）} ^{（注919）} ^{（注920）} ^{（注921）} ^{（注922）} ^{（注923）} ^{（注924）} ^{（注925）} ^{（注926）} ^{（注927）} ^{（注928）} ^{（注929）} ^{（注930）} ^{（注931）} ^{（注932）} ^{（注933）} ^{（注934）} ^{（注935）} ^{（注936）} ^{（注937）} ^{（注938）} ^{（注939）} ^{（注940）} ^{（注941）} ^{（注942）} ^{（注943）} ^{（注944）} ^{（注945）} ^{（注946）} ^{（注947）} ^{（注948）} ^{（注949）} ^{（注950）} ^{（注951）} ^{（注952）} ^{（注953）} ^{（注954）} ^{（注955）} ^{（注956）} ^{（注957）} ^{（注958）} ^{（注959）} ^{（注960）} ^{（注961）}

(注) 1 闕——宮殿にある門のこと。

2 礼——儒教の経典である『礼記』のこと。

3 式路馬——馬の横で敬礼をすること。

4 昭昭——ここでは人の目がつくところ、人前を指す。

5 冥冥——ここでは人目につかないところを指す。

問一 傍線部A「何以知之」について、「之」にあたる内容を具体的に補いながら現代語に訳しなさい。

問二 傍線部B「不為冥冥惰行」を書き下しなさい。

問三 傍線部Cを「かならずあんまいをもつてれいはいせず」と読み下すように、返り点と送り仮名を補いなさい。

問四 空欄 X に入る語として最も適当なものを、次のア～オのなかから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 褒 イ 反 ウ 怒 エ 静 オ 怪

問五 空欄 Y に入る最も適当な漢字一字を本文から書き抜きなさい。

問六 傍線部D「善哉」とあるが、靈公がそのように評価する理由として最も適当なものを次のア～オのなかから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 靈公夫人は、闕にきちんと止まって敬礼するような優れた家臣は蘧伯玉だけだと思っていたが、そうではないと言われたので、それであれば蘧伯玉と同じような優れた家臣がもう一人出てきたことになり、それは衛の国にとって喜ばしいことだと述べたから。

イ 靈公夫人は、闕の前で馬車の音が止まり、闕を過ぎてから馬車の音がしたことから、宮殿に敬礼をしていたと考え、そのような行動ができるのは蘧伯玉だと予測を立てたため、優れた洞察力とともに、すべての家臣の情報も頭に入っていることが分かったから。

ウ 靈公夫人は、靈公に対して最上の敬意をもって接する家臣が二人に増えたことを知って、いずれは衛の国にそのような賢臣が増えていくであろうことを予測し、自らもまた夫である靈公に対して最上の敬意を払うべく、幾度となく頭を垂れて礼をしたから。

エ 靈公夫人は、靈公からの問いかけに、理知的な推察を披露したばかりか、『礼記』のような書物にも通じていることを示し、さらに過ちを指摘された際にはすぐに訂正できる姿勢も見せるなど、衛の国の人材として過不足ない人物であることがわかったから。

オ 靈公夫人は、馬の横で敬礼する蘧伯玉の姿を思い浮かべ、自信を持って靈公の問いに答えたが、実際は違うと言われると考え違いを認めて靈公に頭を下げたうえで、すぐに新たな自説を述べたため、夫人もまた衛の国の賢臣でもあることが明らかになったから。